

貼り薬 広報げろ 2011.4

アルツハイマー型認知症の貼り薬が今年中に承認される予定となりました。現在では多くの病気で内服薬などの代わりに貼り薬が使われるようになってきました。そこで今回は各種貼り薬についてのおはなしです。

貼り薬の種類

I：筋肉や関節の痛みをとる貼り薬。温感（温）湿布、冷感（冷）湿布剤。パップ剤、テープ剤などがあります。温感湿布にはトウガラシエキスやカプサイシンが含まれ、冷感湿布にはメントールや水分が含まれ皮膚に対してはそれぞれ温かく感じたり冷たく感じたりしますが体を温めたり冷やしたりする力はないと考えたほうがよいようです。打撲やねんざ、ぎっくり腰など急性の痛みには冷感湿布を、肩こりや慢性の痛みには温感湿布を選択することもあります。貼って気持ちのよいほうを選べばよいでしょう。打撲やねんざなどで積極的に冷やす必要があるときは氷嚢（氷と水を入れた袋）を、温める場合はカイロなどを併用します。パップ剤、テープ剤には内服薬でも使われる消炎鎮痛剤が含まれています。

II：血管を広げる作用を持つもの。狭心症などの心臓病に使われます。ニトログリセリン、硝酸イソソルビドなどが含まれています。

III：婦人科などでホルモン剤を投与するために処方されるもの。更年期障害など女性ホルモンを補充するために使用します。エストラジオールという女性ホルモンを含みます。

IV：気道を広げて呼吸を楽にする貼り薬。気管支ぜんそく、気管支炎などで使われます。ツロブテロールを含みます。

V：がんなどの痛みをとるために処方されるもの。麻薬として取り扱われています・フェンタニルという麻薬が含まれておりむやみに捨てたりできません。

VI：皮膚の表面を麻酔する貼り薬。注射をする前に注射部位の皮膚の痛みをとるために使います。リドカインという麻酔薬が含まれています。

VII：皮膚の固くなったところを軟らかくするもの。鶏眼（ウオノメ）、胼胝（タコ）などに使います。サリチル酸を含みます。

VIII：禁煙するために使うニコチンパッチ。ニコチンが含まれています。

IX：皮膚の炎症、癬痕の圧迫療法などに使う貼り薬。副腎皮質ホルモンを含みます。

これらの貼り薬に共通するのは含まれている薬が皮膚から吸収されるということです。そのために使用法を誤ると効果がなかったり、薬が体内に決められた以上に入ってしまう副作用を引き起こすこともあります。時には皮膚に炎症を引き起こす場合もありますのでできるだけ同じ場所には貼らない注意も必要です。病院で処方される貼り薬は医師の指示に従って正しく使いましょう。薬はご本人だけのものです。他人に譲ることは絶対にやめましょう。

下呂市立金山病院 院長 古田智彦